

近世後期加賀藩の医者と金沢城内の医療

池田仁子

はじめに

加賀藩の医療や医者については、これまで様々な角度から論じられてきた⁽¹⁾。こうした中で、筆者は金沢などの町場を中心に、藩老横山家の出産や寺家・町家の暮らし、或いは蘭学などの問題と絡めて、医者の具体的な治療を取り上げてきた⁽²⁾。また、特に近年では、「寛文七年金沢図」「延宝金沢図」といった金沢城下の絵図や侍帳にみる医者の居住地、或いは城内での藩主前田家の医療のほか、金沢城造営における怪我人などの治療や疫病流行に対する領民の医療について、少しく紹介した。が、こうした1つ1つの事例研究の積み重ねが肝要との認識のもと、まだ、内容的にも、時期的にも不充分であることはいうまでもない。特に侍帳にみる医者については、近世後期の考察が残っており、さらに、前田家の医療に関して、天保期の一部まで触れたに過ぎない⁽³⁾。

そこで、本稿では、これまでの成果を踏まえながら、引き続きこれらの点について、主に天保から嘉永期ころまでを対象に考察したい。最初に、近世後期の侍帳にみる医者について検索し、その上で、これまでの近世前期・中期・後期の侍帳・絵図登載の医者について比較検討する。次に、具体的な問題として、二ノ丸御殿における13代藩主斉泰の生母栄操院、及び斉泰のそれぞれの治療について、さらに、金谷御殿における前藩主斉広の正室真龍院、斉泰の子基五郎・豊之丞らの診療と医者について、前稿(本稿[註](3)(d)、以下略記)で見てきた当藩の蘭医学導入にも触れながら考察する。最後に、藩の医者の京都遊学とその際の藩からの支給銀、また、町医者や重臣召抱えの御家中医が藩主家の治療に当る場合の誓詞取立ての問題、さらに、吉益北洲を事例に京医師の当藩出仕など、医者の様々な動向について考察したい。

幕末期については、今後の問題として、以上のことから、侍帳や重臣・近習らの日記・記録類を中心とし、筆者がこれまで取り組んできた近世の前期・中期・後期における医者・医療について、一つの区切りとして、どのような点が指摘できるのか、まとめてみたい。

一、近世後期の侍帳にみる医者

近世後期の医者について、前々稿([註](3)(c))で最後に取り扱った天明3年(1783)の侍帳を起点に、その後どのように変遷したかをみると、まず金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵の各侍帳類より各々の医者の抄出を試みたい。すなわち、文化元年(1804)頃の「金藩分限録」、同4(1807)年「加陽武将」、同4年~11年(1814)の「帳秘藩臣録」、弘化元年(1844)「土帳」よりそれぞれ検索・整理すると、[表1]のようになる。

[表1]では、は前時期・前々時期と同じ人物などの場合を示し、侍帳記載の「人口」は「人扶持」に置き換えた。また、「帳秘藩臣録」について、文化4年を主体とし、5年以降の「附録」に記された人物は、次の弘化元年にわたる人物も少なくない故、下方部に【】書で示した。また、分類の欄では天明の侍帳登載の医家を基調とし、以下のように、それぞれa~fの分類を試みた。aはすでに考察した近世前期(元禄6年 1693まで)の侍帳に初出の家([註](3)(b))、bは前々稿で考証した近世中期(享保9年~天明3年 1724~83)の侍帳に初出の家、c以降は本稿で新たに取り上げたものである。すなわち、cは文化元年(1804)頃の「金藩分限録」に初出の家、dは文化4年の「加陽武将」、eは同4年~11年の「帳秘藩臣録」、fは弘化元年の「土帳」に各々、

〔表1〕 近世後期の侍帳に記載された医者一覧

番号	天明3年〔1783〕 「土帳」 49人(町医6人含)	文化元年〔1804〕 頃 「金藩分限録」 39人	文化4年〔1807〕 「加陽武将」 32人	文化4年〔～11年〕〔1807〔～14〕〕 「帳秘藩臣録」 44人〔10人〕合計54人	弘化元年〔1844〕 「土帳」 50人	分類
1	藤田道因、10人扶持		「藤井道閑」10人扶持、西町、丸内横ミソ	道乙、7人扶持		a
2	不破瑞元、7人扶持	良策、5人扶持	俊治(瑞光カ)7(15カ)人扶持、三巴	良策、5人扶持	不和良伯、5人扶持、桶町、三巴、禅・全昌寺	a
3	大石三哲、10人扶持	良策(玄東カ) 7人扶持、西町、丸二州浜		慶安、7人扶持		a
4	加藤玄叔、7人扶持		5人扶持、西町、五七ノ桐	邦安、5人扶持		a
5	内山養福、200石	覚仲、200石	養福、200石、堤丁後、角入角三	覚中、130石		a
6	津田寿軒、50人扶持					a
7	津田正渓、30人扶持	炮庵(胞庵)10人扶持、小立野、井桁ノ内瓜	正渓(昌渓)30人扶持、甚右衛門坂下、片八三	昌元、5人扶持	昌渓、10人扶持、木町壹番丁、片八三、淨・了願寺	a
8	堀宗叔、5人扶持、外科	周庵、50人扶持、中川町	宗叔、10俵、外二5人扶持、龜甲	周庵、10人扶持	上堤丁後、龜甲ノ内花菱、淨・妙慶寺	a
9	能勢玄竹、5人扶持、外科	求訴(求伯カ) 5人扶持、	能瀬三之助(玄竹) 100石、安江丁後、花ヤハタ			a
10	矢田周伯、7人扶持、外科					a
11	久保寿斎、20人扶持、鍼医師	江庵、150石、彦三7、御鍼師	寿貞、20人扶持、彦三7番丁、羽ウチ八	江庵、150石〔三柳、文化5年、200石〕	(三柳、200石) 彦三7番丁、羽団扇、淨・極楽寺	a
12	加来元達、5人扶持	「玄達」15人扶持		「元達」10人扶持		a
13	端丈庵、50人扶持	一庵、20人扶持	丈庵、50人扶持、「養玄徵」、仙石町	一庵、20人扶持		a
14	曲直瀬亨徳院、300石	「高徳院」300石、江戸(ママ)	亨徳院玄迪、300石、京都在住候、四ツ目	「曲直瀬亨徳院」200俵、京在住	京都居住、風車、淨・京知寺	a
15	江間元順、7人扶持、歯医師	「玄順」7人扶持、上堤町	「玄順」7人扶持、堤町後	順哲、5人扶持	元林、10人扶持、堤町後、クヤウ、禅・(棟岳寺カ)	a
16	江間口庵、10人扶持、歯医師	御竹(儀竹、久傭、篁斎カ)10人扶持、西町	江庵、10人扶持、西町、九ヨウ	篁斎〔口科、文化5年20人扶持、金谷御七役、文化9年150石〕	三折、300石、十間町藪ノ内、クヤウ、禅・棟岳寺	a
17	佐々正益、250石、法橋	玄庵(芸菴、正益、政吉)300石、高岡町	「正益」250石、高岡丁、丸内ウチ八	「芸庵」150石	130石、高岡町、丸ノ内シユロノ葉、禅	a

番号	天明3年〔1783〕 「土帳」 49人(町医6人含)	文化元年〔1804〕 頃 「金藩分限録」 39人	文化4年〔1807〕 「加陽武将」 32人	文化4年【～11年】〔1807〔～14〕〕 「帳秘藩臣録」 44人【10人】合計54人	弘化元年〔1844〕 「土帳」 50人	分類
18	佐々木宗庵、5人 扶持、鍼医師	宗順、10人扶持、 長丁(京在)	宗庵、10人扶持、 在京、四つ目	5人扶持、京在住		a
19	久保定能 20人扶持、鍼医師	定円、彦三6、 15人扶持	定能、15人扶持、 彦三5番丁ヨコ、 丸内ニツ違	定円、15人扶持、【文化9年20人扶持】	定三、8人扶持、 彦三5番丁、羽団扇	a
20	小瀬甫元、20人扶持		「甫元順竹」10人扶持、堤丁	舛庵、15人扶持	貞安(舛庵、来吉) 10人扶持、彦三7番丁、禪・普明院	a
21	南保玄伯、300石	玄隆、10人扶持、 御坊丁	玄達、150石、角入角内三	玄隆、10人扶持	「南部」8人扶持、 角入角内三ノ字、禪・国泰寺	a
22				【加来元兆(元達嫡子)文化7年召出、5人扶持】	元貞、13人扶持、 下材木丁、禪・長久寺	a
23				【端玄川(一庵の子)文化6年5人扶持(遺領20人扶持の内)】	丈吉、5人扶持、 三眷(三剣カ)禪・光岸寺	a
24			堀部養竹、20人扶持(断絶後復活カ)			a
25	林玄悦、300石					b
26	池田昌貞、200石、 法橋	養仲、5人扶持	昌貞、200石、父 玄英、青木新蔵向、 丸ノ内笠リント	養中、5人扶持	元昌、7人扶持、 宗半町、丸ノ内笠 リントウ、淨・弘願時	b
27	大庭卓元、10人扶持	100石、宗半丁、 檜扇	「卓元 順元」 10人扶持、シヲヤ 丁	「卓元」100石【文化9年150石】	探元、240石、イ ケスノ小路、檜扇、 淨・大蓮寺	b
28	大高(東栄) 10人扶持、江戸	「東栄」200石	幾次郎、芳竹(東 栄厚胤カ)10人扶 持、青木新兵衛向、 輪違	東栄、200石、江戸定府 【文化5年250石】		b
29	横井元泰、200石	元秀、400石、外 二50石加増、彦三 5、丸ノ内三鱗		【文化5年450石】	元仲、300石、彦 三町長谷川学方へ 同居、石竹ノ花、 禪・広昌寺	b
30	小川寿円、10人扶持、 鍼医師	玄益、120石、御 坊町	寿円(玄益カ)10 人扶持、ヲモタ力	玄益、170石		b
31	八十嶋寿三、200石	東庵、200石	寿三、200石、彦 三4番丁、左巴	東庵、200石		b
32	石黒周軒、15人扶持	「石黒」15人扶 持、井桁				b
33	江波三意、20人扶持					b
34	内藤润良、30人扶持	宗庵、250石、長 丁3	润良(宗純カ)30 人扶持、法船寺丁、 抱メウカ	宗安、300石	宗春、200石、右 衛門橋下、抱松葉、 禪・妙国寺	b

番号	天明3年〔1783〕 「土帳」 49人(町医6人含)	文化元年〔1804〕 頃 「金藩分限録」 39人	文化4年〔1807〕 「加陽武将」 32人	文化4年〔～11年〕〔1807〔～14〕〕 「帳秘藩臣録」 44人〔10人〕合計54人	弘化元年〔1844〕 「土帳」 50人	分類
35	魚住道徹、20人扶持	道仙、30人扶持	道徹、20人扶持、 彦三3番丁	道仙、200石		b
36	大津柳仙、15人扶持	宗瑞、120石、上丸二橘		長円、20人扶持、江戸在住	善安、20人扶持、 江戸在住、三木瓜、 江戸駒込長元寺、 嘉永4年新知200石	b
37	森快庵、10人扶持	「快安」10人扶持	ミソクラ丁、丸内織部	【文化6年17人扶持】	200石、ミそくら丁、丸ノ内橘、 淨・心蓮社	b
38	丸山了悦、7人扶持	了悦(応保)100石、長丁	7人扶持、御医 小兒、巳(文化9年) 100石、深見 兵庫ヨコ(図書橋 云)、丸内違夕力 ノハ	100石 【文化9年150石】	300石、堤丁後、 淨・光学寺	b
39	中村文安、10人扶持	「文庵」20人扶持		「文安」150石		b
40	奥田、10人扶持					b
41	今井玄昌、150石、 外科	「元昌」	春庵、彦三3丁目	昌軒、10人扶持	元真、15人扶持、 彦三3番丁、菱井 柄内鷹、一向・西方寺	b
42	有沢長庵、10人扶持、 外科			了長、7人扶持	良貞、20人扶持 (「十口の内二 丁金」)	b
43	関口道育、10人扶持、 外科	道哲(道育カ)30人扶持		道育、30人扶持、江戸在住		b
44	二木順白、15人扶持、 鍼医師	順仙、15人扶持	養元、10人扶持、 古寺町	順伯、15人扶持	順孝、100石、才川荒町、一向(マ マ)・高岸寺	b
45	桜井了元、5人扶持、 鍼医師	高岡町	「石浦町横」	100石	「了元」(直寛) 10人扶持、右衛門 橋高、丸ノ内二ツ 引、禅・宝勝寺	b
46	奥田橘庵、5人扶持、 捻					b
47	千秋宗儀、公事場・ 非人小屋御用町医師、 御目見被仰付					b
48	白井宗塵、公事場・ 非人小屋御用町医師、 御目見被仰付					b
49	上田養元、公事場・ 非人小屋御用町医師、 御目見被仰付					b
50	黒川元良、公事場・ 非人小屋御用町医師、 御目見被仰付	元恒、15人扶持、 大工町		【文化9年20人扶持】	元良、20人扶持、 大工町、一巴ノ下 一文字、一向・善 福寺	b

番号	天明3年〔1783〕 「土帳」 49人(町医6人含)	文化元年〔1804〕 頃 「金藩分限録」 39人	文化4年〔1807〕 「加陽武将」 32人	文化4年【～11年】〔1807〔～14〕〕 「帳秘藩臣録」 44人【10人】合計54人	弘化元年〔1844〕 「土帳」 50人	分類
51	長谷川覚峰、公事場・非人小屋御用町医師、御目見被仰付			学方、15人扶持	学方、100石、桶町、三巴、真・千手院	b
52	高沢仙立、公事場・非人小屋御用町医師、御目見被仰付					b
53				【大高玄哲、文化9年江戸にて5人扶持、同11年父東栄の遣知250石相続】	元俊、250石、江戸在住、ワチカイ	b
54				【小川玄沢、玄益の子、文化9年5人扶持、同年家督170石】	170石、古寺町、スハマ、一向・専光寺	b
55				【魚住道仙、道徴、道徹 文化7年100石】	恭庵、7人扶持、河原町、藤ノ丸、淨・心蓮社	b
56				【八十嶋東庵 禅庵、東庵の子 文化9年150石跡目】	禅庵、10人扶持、彦三4番丁、左三巴、天・顕正寺	b
57		中野又玄、130石、豎丁				c
58				【中野通安(又玄の子) 文化9年5人扶持】	「通庵」180石、豎町入口、ツタ、一向・正(ママ)静寺	c
59		松田玄亭(宇カ) 15人扶持		「玄宇」【文化9年賢太郎召出、跡目15人扶持の内、5人扶持】	常安、5人扶持、木くら町、井桁、禅・大乗寺	c
60		藤井貞三、15人扶持	20人扶持、江戸		貞元、15人扶持、江戸在住、「右藤巴」	c
61		下田尚斎、7人扶持		15人扶持	玄丹、5人扶持、一向・能州徳蓮寺	c
62		関玄郁(玄迪、如篤) 5人扶持		「玄迪」		c
63			小倉正因(良相) 7人扶持、桶町			d
64				久保江元、5人扶持		e
65				徳田玄庵、5人扶持、町奉行支配下	純作、5人扶持、下安江丁、淨・在村妙法寺	e
66				河合養春、5人扶持、町奉行支配下	円斎、5人扶持、光岸寺、一向・越前勝縁寺	e
67				畠立泰、合力米30人扶持、禁裏御医者畠立慶弟、金谷御用、文化4年4月より		e

番号	天明3年〔1783〕 「土帳」 49人(町医6人含)	文化元年〔1804〕 頃 「金藩分限録」 39人	文化4年〔1807〕 「加陽武将」 32人	文化4年〔～11年〕〔1807〔～14〕〕 「帳秘藩臣録」 44人〔10人〕合計54人	弘化元年〔1844〕 「土帳」 50人	分類
68				【藤井方亭、金谷御殿病用として宇田川玄真(15人扶持)と同道、文化6年初御目見、7年帰国、同年12月召出、20人扶持】	「芳亭」20人扶持、江戸在住	e
69				【白崎玄水(玄真)文化7年外科、10人扶持、非人小屋等三箇所懸り、同年玄令跡目7人扶持】	玄令、10人扶持	e
70					鮎延秀庵、15人扶持、江戸在住	f
71					塩川鯉一郎、30人扶持、御合力、江戸在住	f
72					高木学純、10人扶持、いなり橋下、淨・妙泰寺	f
73					森良斎、70石、十間町	f
74					鈴木立斎、10人扶持、袋町、井桁ノ内違丁字	f
75					堀昌安、10人扶持	f
76					片山君平、120石、小立野、葵崩、一向・長周寺	f
77					吉田道碩(長淑の養嗣子)、20人扶持、江戸在住	f
78					高尾鉢安、5人扶持、豎町	f
79					高嶋正穎、120石、豎町	f
80					篠(染)田方叔、150石、角切角ノ内立葵	f
81					横井自伯、130石、彦三8番丁	f

初出の家を示す。この結果、aは24例、bは32例、cは6例、dは1例、eは6例、fは12例となり、bがもっと多いことがわかる。次に、近世後期の医者総体、81例について(同一侍帳に親と子が別々に記載されている場合もあり、この場合は同じ医家でも親と子で1例ずつ数えた)、これを100とした場合、およそaが30%、bが40%、cが7%で、dが1%、eが7%、fが15%である。すなわち、bがもっと多く、全体のほぼ4割を占める。次に多いのはaで、侍帳の中でもっとも遅いfがこれに次いでいる。また、後期の侍帳4種に記載された総藩士における医者の割合についてみると、文化元

年頃では3.09%ほどでもっと多く、文化4年次では1.9%、同年から同11年まででは、2.3%、弘化元年が2.65%で、平均すると、ほぼ2～3%程である。因みに13番と23番の端、及び22番の加来は、天明の侍帳には無記載だが、元禄期の侍帳に登載されているゆえ（[註](3)(b)・(c)）、分類はaとした。また、48番の町医師の白井宗塵に関連して、同家は、近世前期、寛文10年（1670）非人小屋勤務の白井宗庵の名が⁽⁴⁾、一方、文化8年「金沢町名帳」（原本は玉川図書館蔵）⁽⁵⁾の十九間町に町医師白井良益の名がみえる。さらに、「御普請奉行諸事留」（加越能文庫）によれば、天保7年御用勤の町医師白井信斎が屋敷を藩に返上しており、引続き、「官事拙筆」3巻（玉川図書館奥村文庫）弘化2年（1845）7月26日条には「三ヶ所懸り御用町医師白井信斎」につき、役儀指除きのことが記されている。すなわち、白井家は近世前期から後期まで、藩の施設の御用医者を勤めていたことがわかる。次に49番の上田養元に関連して、「金沢町名帳」の石引町に「町医師 上田悦安後家」が見える。また、52番の高沢仙立に関して、同じく右史料の木倉町に「三ヶ所懸り医師 高沢仙立」と見え、これは本人か、嗣子であろう。77番の吉田道碩は文化7年に当藩に出仕した吉田長淑（後述）の子であるが、長淑は「帳秘藩臣録」に漏れていることがわかった。なお、城下町における医者の住居をみると、加越能文庫「金沢文書」4巻に「今の西町ハ本ト医師町ニ而、医師而已居たりしよし」と見え、近世には西町は医師町とも称されていたことがわかり、興味深い。

次に、前期・中期・後期全体の医者について、これまでの研究成果から新規採用の医家は、どの時期にもっとも多いかを見るため、試みに近世前期（～元禄6年）、中期（享保9年～天明3年）、後期（文化元年～弘化元年）の各時期に分けてみると、すなわち、前期は8件（[註](3)(b) [表1A]）の山科長庵、沢田、飛鳥井、道甫、名倉、津田、覚与、山科理庵）及び42件の計50件、中期では藩医67件及び御用医者6件の計73件、そして、今回新たに取り上げた後期は25件である。すなわち、近世中期に新規に採用された医家がもっと多いことがわかる。次に前期が多く、後期の新規採用は、もっとも少ないことがわかる。つまり、後期をみると前・中期より続いている多数の医家の中で、特に中期より新たに採用された医家がもっと多いことが、これからも確認できる。また、近世前期よりほぼ各時期を通し、弘化期まで存続する家は、不破・大石・加藤・内山・津田・堀・久保・端・曲直瀬亨徳院・江間・佐々・小瀬・南保の13家ほどである。これは前期・中期・後期の全体の医家数の16%ほどに相当する。なお、文化期以降の医者の中には、蘭学医もあり、或いは他の医家の後裔の中にも蘭学入門者が含まれ、彼らは近代の西洋医学の底流となつた⁽⁶⁾。

ところで、近世の侍帳・町絵図にみる医者の多くは、藩医であるが、町絵図や天明3年の侍帳などにおいて、一部町医者身分の者も含まれているので、これについて考えたい。その人数と禄高など、近世の前期・中期・後期の各時期における差異の幅、記載の藩士総数における差異の幅、全体数における医者の数の割合、禄高の幅について、[表2]にまとめた。さらに、各侍帳の記載には、身分・人数など脱漏、差異があるが、登載の医者は前期では、9～29人、中期では35～49人（天明3年の侍帳では御用医者である町医6人を含む）、後期では32～54人というように、次第に藩召抱えの医者や御用医者の人数が増加していることがわかる。また、各時期のそれぞれの侍帳の記載の仕方、登載人数はまちまちであるが、記載された総藩士数に占める医者の数は⁽⁷⁾、前期・中期がおよそ1～2%ほどで、後期が2～3%というように、近世後期には数だけではなく、医者の占める割合が大きくなっている。藩の医療対策の充実化を垣間見ることができる。次に近世を通して、藩医の禄高をみると、高い方は600石から、低い方は小判10両までであったが、ほぼ300石前後から5人扶持である藩医が多く、彼らは、およそ藩召抱えの者の中では、中級クラスに相当する。

[表2] 各侍帳・町絵図登載の医者の概数

時期	西暦	侍帳・絵図名	人数	禄高等 (石)	各時期内差異の幅		
					人数	記載総数における割合	禄高等 (石)
前期	1596～1615	慶長年中御家中分限帳	10	300～100	9～29	1～2%	500～小判10両
	1615. 16頃	元和之侍帳	9	300～100			
	1629	寛永4年侍帳	14	500～100			
	1659	万治2年与外人數之帳	18	300～30			
	1668	寛文8年加越能土帳	22	300～判金2枚			
	1671	寛文11年侍帳	26	300～小判10両			
	1675	延宝3年御中侍帳	29	300～10人扶持			
	1677	延宝5年侍帳	26	220～金子5枚			
	1688	元禄元年侍帳	28	300～金子5枚			
	1694	元禄6年侍帳	23	300～金子5枚			
中期	1667	寛文7年金沢図 (町医等御用医含む)	23		35～49	1～2%	600～5人扶持
	1673?	延宝金沢図(同上)	21				
後期	1724	享保9年侍帳	35	600～5人扶持	35～49	1～2%	600～5人扶持
	1783	天明3年侍帳 (町医者6人含む)	49	300～5人扶持			
後期	1804	文化元年頃金藩分限帳	39	450～5人扶持	32～54	2～3%	450～5人扶持
	1807	文化4年加陽武将	32	300～5人扶持			
	1807～14	文化4年～11年帳秘藩 臣録	54	450～5人扶持			
	1844	弘化元年土帳	50	300～5人扶持			

池田仁子、本稿[註](3)(a)～(c)及び本稿[表1]より。貨幣換算については日置謙『改訂増補 加能郷土辞彙』北國新聞社、昭和48年復刻を参照。

二、具体的な医療の様相

前章では、各侍帳からそれぞれの医者を抄出し考察を加えた。次に、金沢城内で彼らがどのような医療行為を行ったのか、具体相についてみていきたい。

①二ノ丸における榮操院の治療と医者

二ノ丸における天保12年(1841)及び嘉永3年(1850)の榮操院の治療について、加越能文庫「成瀬正敦日記」「官私隨筆」(ともに自筆本)「文慶雜錄」より主な内容を[表3]に示した⁽⁸⁾。なお、[表3][表4]とも太字は蘭医学修得者を示している。

[表3] 「成瀬正敦日記」等にみる二ノ丸での栄操院の治療と医者

年(年齢)	月	日付、主な記事(【】内は「官私隨筆」、内は「文慶雜録」による)
天保12年 〔1841〕 (53歳)	2	4日横山山城守家中医津田権所(隨分斎) 拝診の由、昨日命あり。26日【森快安昨夕江戸より帰り診療、「余程御六ヶ敷御事」と診断】 27日快安1昨日到着、昨日も診療、「靈瘍之御症」にて「御重症」と診断。【京都より医者招請并齊泰江戸参勤延引願、重臣ら申入】 28日【京都医師の義、三角典薬少允・山本安房介・森田周一 古方家 が宜き旨藩医ら上申。栄操院昨日より御穏。1度大用御通、御膳30目計召上】 29日奥村丹後守家中医片山君平、横山山城守家中医森良斎が治療拝命。津田権所も拝診を命(8日にも)。【夜前より度々御下り、錢氏白朮散に転じ指上。奥村栄実、大庭探元・丸山徹叟・森快安に栄操院の様態承る】
	3	朔日【夜7度程御下り、朝兩度下る。昨日は100目程、今朝30目計召上る由、藩医上申】 2日津田権所・片山君平・森良斎1昨日より連日治療、様態書差出。3日【御様態同様】 4日【栄操院御滞のため齊泰江戸発駕延引の事幕府に届出(4月11日発駕)】 6日前月29日より錢氏白朮散、「加黃芩紫胡」を調進、「補井益氣湯人參」3分加え差上。9日加藤邦安・長谷川学方・鈴木立白・梁田方叔、高嶋正穎、栄操院診療準備のため人別上申。成瀬正敦、京都医師山本安房介身分の義森快安へ尋る。福井近江守実弟、山本家へ養子に入る、「葉番衆御医者」で六位との由。13日【安房介近日下向に付き二ノ丸にて御鈴通るか、直に御広式へ参るか詮議】 18日禁裏御医師山本安房介金沢到着。19日【安房介、栄操院相診。齊泰面会。藩老ら瀧之間にて逢い、御鈴口通り、御奥へ、御表、矢天井之間へ着座、森快安・江間簞斎罷出、奥村栄実も参上、挨拶】 20日【安房介へ栄操院治療依頼】 21日夜前発汗、香気強剤半減し調進。齊泰、安房介・簞斎両容躰書御覧。23日安房介、栄操院及び金谷御殿の真龍院を拝診。25日安房介、齊泰御平脈診拝命。安房介・簞斎・快安拝診。弟子へ料理下賜。安房介竹沢御庭拝見の事、簞斎願上げ、許可。26日安房介、竹沢御庭拝見、蓮池高之御亭にて簞斎・邦安詰る。薬は森快安が「当飯真貴湯」を調進。安房介は旅用金品拝領。27日【安房介、京都に向け金沢出發】
	4	13日栄操院御容態同篇。食事150目、御大便2度、小水8合5勺計。17日栄操院御容態同篇。食事150目、御大便2度、小水9合計。19日同篇。食事153匁、御大便3度、小水8合5勺。23日昨日は食事158匁、大便なし、小水7合8勺計。
	5	24日夜前より時氣御触、水瀉両度、熱氣・御乾き、簞斎・快安診療、食欲少々、御薬柴苓湯に転ず。
	6	朔日昨日森快安御薬効果余りないと申聞。本多播磨守家中医三宅当一、町医広野了玄の診察詮議。是まで通り津田権所等へ仰付。2日1度水瀉、2度大便、小水3合5勺。3日同。4日同篇の内、薬1昨日より「香砂、六君子湯、加精苓沢」より人參に転ず。三宅当一・広野了玄翌日より診療に加わること命。5日三宅当一・広野了玄拝診、当一は「春沢湯」、了玄は「真武湯加指苓沢瀉」調進を進言。快安は附子は見合せ申上。9日御穏、日常常飯96匁、煎返127匁、御大便少々宛両度、小水1升3尺。21日江戸より藤井方亭派遣(14日発足)。22日方亭金沢到着。23日方亭拝診、「御外症」なしと診断。【「御邪氣」なく、自然回復を待つよう、「キナ」と桂枝2味を潰し処方を進言】26日方亭後日江戸へ発足のこと快安伺出。27日方亭1両日中御暇につき栄操院より小判3両下賜。基五郎・豊之丞・桃之助拝診申渡され、小判1両拝領。
	12	15日【栄操院回復、内々お床払18日に延期】 19日治療医師に慰労金品下賜(快安へ小判5両、染物2反、簞斎へ金2500疋、邦安へ小判5両、立白・正穎・覚方・方叔へ小判3両宛)。成瀬正敦、御床払恐悦呈書。

嘉永3年 〔1850〕 (62歳)	11	4日栄操院御意により加来元貞が診療拝命。元貞御薬「七味降氣湯二加附子」調進。（朔日は洲崎凌三・白順・堀昌安、2日は山本文玄斎・渡辺元隆も拝診）。6日元貞拝診。昨朝より病疾御難儀、この日「真武湯加人参」指上の義快安らと詮議。【奥村栄通、栄操院の御様子、加来元貞へ承り、油断なきよう申入。先日以来「御水腫」となり、夜前より「御痔脱疾も御難儀」にて、御疲労増す。食欲・御通じ減少】 7日昨晚様態急変も計難き旨藩医申上、元貞拝診、「御危迫」にて「熊胆」差上、幾分平穏、「かたこ」少々召上。快安・探元等も詮議。次第に御疲労。元貞も参上、拝診。7時過「御指重り、御事切レ」言語絶し、戌下刻御逝去。 栄操院先日より「御帯下之御病症」にて御逝去
-------------------------	----	--

[表3]よりみると、天保12年栄操院は、「靈癆之症」（精神的疲労カ）が重症で、「御下り」（下痢）が続き、処方された薬は加黄芩紫胡・補井益氣湯人参・当皈真貴湯・錢氏白朮散等で、治療医は横山家家中医津田櫻所・森良斎、奥村丹後守家中医片山君平、藩医の加藤邦安・長谷川学方・鈴木立白・梁田方叔・江間篁斎等が担当、御様態は藩医の森快安・大庭探元・丸山徹叟に報告される。また、禁裏医師の山本安房介も京都より招請され治療に当たり、帰京前日には竹沢御庭を拝見、蓮池高之御亭にて御菓子等を拝領する。この時「成瀬正敦日記」天保12年3月25日条によれば、當時竹沢御殿周辺は「御住居無之、見苦敷」状態ゆえ、「指支」とのことあったが、「重而強而相願」として拝見が許可される。12代藩主齊広の隠居所として造営された竹沢御殿は、齊広逝去後の天保元年春、取壊しが開始されていたが、一方、同8年泉水も造られ、蓮池庭と合せ整備が成されている⁽⁹⁾。また、この年天保12年栄操院は、時気に当り、水瀉、発熱、御乾の症状が出て、紫苓湯・キナ・桂枝・香砂・六君子湯・加精苓沢等が調進され、治療医は前年の医者と同様で、ほかに三宅当一・広野了玄・藤井方亭も加わる。そして、嘉永3年には水腫・痔脱疾（帯下の御病症）もおこり、七味降氣湯・附子・真武湯加人参・熊胆等が処方されるが、難儀・危迫・指重り、終に御逝去となる。治療に当たった医者としては、上記のほか、加来玄貞・洲崎凌三（白順）・堀昌安・山本文玄斎・渡辺元隆などであった。

なお、嘉永3年の治療では、大野織人 近習御用 自筆「諸事要用雑記」（17冊31）によれば、10月18日山本大和守等、京都医者の再招請は栄操院が断ったため、この時は見合わせることとする。また、山本大和守（安房介、1795～1868）は、天保元年、典薬寮医師となり安房介に任せられ、弘化3年（1846）大和守、安政2年（1855）典薬大允となり、孝明天皇の診療も行なうなど、名医として著名であった。「天保医鑑」に「内科 源隨、字有功、号達所、博学、善詩文 元誓願寺黒門東 山本安房守」とみえ、また、「洛医人名録」に「本道 室町下立売南 山本大和守 名隨、字有功、号達所」と記される⁽¹⁰⁾。さらに、[表3]の山本文玄斎は、文化期華岡青洲に入門する金沢百々目木町の医者山本玄中であり、また、渡辺元隆は小石元瑞門下で⁽¹¹⁾、文化期の住まいは御小人町、横山図書の家中医である（「金沢町名帳」）。

②二ノ丸における藩主齊泰の治療と医者

次に、二ノ丸における天保13年（1842）の齊泰の治療について述べて行きたい。「成瀬正敦日記」「官私隨筆」「猪山直之日記」より主な記事を[表4]にまとめた⁽¹²⁾。

[表4] 天保13年（1842）5月から6月 二ノ丸における藩主斉泰の治療と医者

月	日	「成瀬正敦日記」にみる主な記事（【 】内は「官私隨筆」、 内は「猪山直之日記」による）
5	29	斉泰、両3日前より少々足部が肉張り、除湿湯調進の所、葛根加蒼朮湯（実は越脾湯加朮苓）差上、大庭探元ら拝診。 時気御触れて大庭探元等拝診。 怒駄肉張気味、御通じ不良
6	朔	【少々御むくみ・発汗有り】
	3	葛根加蒼朮湯差上げ
	5	斉泰、体調不良、1昨日より御保養。
	8	長谷川学方毎日朝夕の内1度、江間篁斎・加藤邦安は隔日朝夕の内1度1人、それぞれ拝診。
	9	同篇の内、小水少なく、1昨日・昨日も2合計。昨日より「越脾湯三加朮苓加犀角」調進。邦安・横井自伯、奥村丹後家中医片山君平、横山山城守家中医森良斎も拝診。 余程発汗、御通じなし。奥村丹後家中医片山君平、横山山城守家中医森良斎も拝診
	10	小瀬貞安・鈴木立敬、診並御薬相見拝命。招請京都医師の義、及び診療泊番藩医の義、探元へ相談。 泊番は篁斎・立白（鈴木立敬カ）・邦安・高嶋正穎・覚方・小川玄沢・中野隨庵・二木順孝と定り、この日探元・玄沢が診療、玄沢泊番。 御容態不良、京都三角典薬頭などの内、招請を詮議
	11	貞安・立敬誓詞届出、拝診し医按書立。探元・篁斎・江間元林・学方も拝診。
	12	少々御穩、召上は都合151匁2分、御小水1合6尺。大犀角湯指止の旨探元申聞す。朝邦安・津田昌渓拝診。夕は探元・邦安・立白拝診。立白は直に泊番。
	13	昨日召上は都合165匁、小水1合、夕診は探元・篁斎・正穎。朝診は探元・関玄廸・学方が勤める。御同篇の内御穩。御通量不良に付君平・良斎も拝診。
	14	昨夕診は貞安・立敬。昨夕成瀬正敦は御様態を探元・篁斎・邦安に尋る。昨日召上り145匁、小水1合5匁。朝診探元・篁斎・元林。御穩。夕診は探元・隨庵・学方。御同篇。
	15	朝診は探元・邦安・松田常安。御同篇。昨日召上は150目、小水1合5匁。君平拝診命。黒川元良も眼病休養の所、拝診願、拝命。「蘭藥」の義詮議、山城守家中医津田随分斎、長将之佐（連弘）家中医明石倅春作、横山政次郎（政和）家中医も誓詞届、拝診。加来元貞診藩医拝命。誓詞届。大便御通なく、1貼宛「枳蘇散加大黃」兼用調進。本剤は2貼宛指上の由、探元申聞す。
	16	朝診探元・学方・玄沢・正穎、御同篇。この日より朝夕4人宛診療の旨探元申聞す。良斎等拝診の節は藩医1人も拝診。
	17	昨夕診探元・篁斎・立敬・元林。昨日召上は145匁2分、御大便多く1度、小水2合計。朝診探元・立白・順孝・常安。昨夕・朝熱氣有る由探元申聞す。君平・貞安昼診。久保三柳御鍼治。拝診は朝3人、夕2人となる。
	18	昨夕診探元・学方。朝診探元・正穎・昌渓。朝夕三昧、木薬丸（枳柿入）小丸「百四五十粒宛」犀角1貼1匁宛て入て調進。良斎も拝診。夕診は玄沢。
	19	昨日召上131匁5分、小用2合2匁。夜前少々御寝兼ね御乾嘔。明け方より快方、探元拝診。朝御穩。君平も拝診。
	20	〈町医者山本文玄斎・鶴見啓輔拝診誓詞取立て。招請候補京都医師3人が断ったため、小林豊後守に定まる(21日発足)、従者等の人数は代診役・若党・弟子等の17人、駕籠かき等は31人、駅馬2疋の事につき16日付で豊後守が上申
	21	【成瀬参り、昨夕斉泰御様態悪化、夜寝兼ね、心下御痞、脛廻り少々水気減少、探元申聞す由報告あり。朝沈香豁胸湯調進との事。且只今にては「蘭医之申上候ジキターリス御用」るか否か詮議するよう申談】 18日以来乾嘔気味のため、朝より「沈香豁胸湯」兼用、木薬丸を調進する。晩より「施覆花湯加犀角」兼用

6	23	「施薬加湯」に転じ、木薬丸調進。蘭方の「ジキタリス」詮議の上、指上げず
	24	様態悪化に付、豊後守出迎え、20日足軽出発、23日越前鯖江で飛脚違い御様態書渡し急ぐ様取計う
	25	【朝豊後守金沢到着、登城、奥書院横廊下屏風囲にて探元・学方参り様子述る。豊後斉泰拝診、又右所へ退座、奥村ら挨拶、御居間書院二之間着座、重臣、成瀬等4人並探元・学方・篁斎参り御様態承る。のち滝ノ間で料理出す。相伴は横井自伯。再診後御居間書院へ同断。主治方法は豊後守の家法で、七味降氣湯・兼用外台甘草乾姜湯。便秘のため躰咎菜湯指上げ、再び滝ノ間へ退座、藩老ら挨拶】小林豊後金沢到着。宿は石浦屋文輔方
	26	豊後守、拝診。26日付様態書・薬方書上る
	27	頃日小水2合半~4合2尺程。豊後守拝診。脚気は惣じて「御氣合」に付き「御痘癬之御症」、「御辛抱」肝要と上申、豊後守・同弟子・家来らへ下賜銀等あり
	29	筑前守、斉泰治療のため江戸より森快安派遣、金沢に到着

[表4] にみるように、天保13年斉泰は脚気に苦しむが、このほか、5月末から6月にかけて、足肉が張り、むくみ・発汗・時気当り・発熱・心下痞え・乾嘔・便秘などの症状が出る。これに対し、薬は除湿湯・越脾加朮苓・大犀角湯・枳蘇散加大黃・木薬丸・沈香豁胸湯・施覆花湯・七味降氣湯・甘草乾姜湯・躰咎菜湯などが処方される。これら処方の効能等、詳細は不明だが、担当医は大庭探元・長谷川学方・江間篁斎・加藤邦安・横井自伯・小瀬貞安・鈴木立敬・小川玄沢・中野隨庵・二木順孝・江間元林・津田昌渓・関玄迪・松田常安・黒川元良・久保三柳・高嶋正顥のほか、家中医の片山君平・森良斎・津田隨分斎・明石春作、当時町医の山本文玄斎・鶴見啓輔、京医の小林豊後守である。7月には斉泰は、首から肩の筋が引きつる痙攣や便秘のほか、肛門の脇の小出来物に悩まされ、甘草香赤湯・生商陸・大靈丸・膏薬等で治療され、医者は森快安も加わる。8月に入ると、次第に快方に向かい、食事の量も増加傾向にあった。

斉泰に対するこの時の治療に関しては、前稿でも若干紹介したように、「猪山直之日記」天保13年6月23日条によれば、「施薬加湯」に転じ、その上、木薬丸についても調進されたが、蘭方の「ジキタリス」については、詮議の上、指上げないことになった。すなわち、「但、此間中蘭方之ジキタリス指上候義、蘭医御僉議有之候得共、容易ニ指上候品ニ而無之、漢医之面々用候義、手覚も無之旨に而指上不申、右通剤之由」と記載されている。また、27日条で、豊後守は斉泰の御様態書(26日付)を次のように記す。時気に当り、発熱、手足麻痺、少水難渇、脚気、痞え、食欲不振であるゆえ、「降氣剤御兼用加味甘草湯乾姜湯」を調進する。そして、魚類は一切禁食、野菜を「天火」で作ったものの、干菓子(落雁は禁食)、氷おろし、西瓜(1日10勺程)とする。ほか、「十味姜水煎」(桑白皮・半夏・茯苓・木通・香附子・檀香・紫蘇・枳椇・縮砂・吳茱萸)、「甘草乾薑湯」(白朮・茯苓・芍薬等)、「赤小豆剤」(防己・茯苓・杏仁・桑白皮・葶苈)等の薬法を書上げている。

[表4]では紙幅の関係上、6月の分までしか示すことが出来なかったが、「成瀬正敦日記」では7月・8月も食事・排便の分量や症状に応じた処方薬の変更、医者の診療や泊番の交替の様子が詳細に綴られている。例えば、7月朔日御脈が夥しく、便秘気味のため、「三黃丸加鷄鵩菜」(鷄鵩菜はマクリと訓じ、回虫駆除薬)も調進され、また、江戸より森快安が到着し、斉泰の病状を「御虚腫」と診断する。翌2日豊後守は痙攣(頸・肩の引きつり)があるとして、木薬丸犀角煎汁を、また、13日御通じがないため大靈丸をそれぞれ処方する。この間、「成瀬正敦日記」10日条では、前日召上りは、140目、大用1度、小水2合7勺8才で、発汗が少しあり、篁斎・快安・探元・学方・順孝・三柳が、

斉泰の「御保養中」は当分御居間に詰ることとなる。

また、8月14日には小水8合9勺2才、大便1度あり、豊後守が夕診するが、同人は30人扶持を拝領することとなる。この時登城・拝診の様子を「成瀬正敦日記」（16日条）・「猪山直之日記」より整理すると、およそ次の如くである。豊後守は城中裏式台より柳之間廊下、杉戸内船之間屏風囲内を通り、坊主の先立ちにて進み、彼ら坊主の給仕にて茶多葉粉盆が出され、近習頭が挨拶、程なく御居間書院にて拝診する。続いて御居間書院縁側を通り、御様態を御居間書院三之間にて御用部屋衆が承る。元の御屏風囲を通り、御薬の調合が済み、溜之内にて御菓子等を拝領する。

かくして、「成瀬正敦日記」天保13年8月23日条では、豊後守はこの年6月25日より8月朔日迄は毎日両度、同2日より25日まで、毎日1度宛拝診、合計96度の治療をする。8月19日迄の御薬は、煎薬276帖、大靈丸29包、木薬丸4包であった。また、豊後守は基五郎らも拝診したことにより、白銀・鰯筋等を拝領し、同人の弟子の代診役・調合役にも白銀が下賜された。豊後守が在金沢の時は、薬等につき探元らは、彼の指示を仰いでいる。また、同人は24日帰京するが、その際、前年の京医山本安房介の例に倣い、竹沢の御庭や蓮池の御庭を拝見し、高之御亭で御菓子などを拝領している。

探元の咄では、この年9月26日、斉泰は近習の肩に手を懸け、10足程歩行し（「猪山直之日記」）、11月7日には、追々順快につき、篁斎ら藩医の当直を廃す旨、探元へ申談じ、拝診方法は従来通りとなる。11月21日、昨夕斉泰は御手を突き、御自身で「御立居御出来」に成られた旨を探元が申述べている（「成瀬正敦日記」）。また、「司農典 七之抄」（加越能文庫）によれば、この天保13年翌月の12月段階で、斉泰の体調不良は御快方気味ではあったが、まだ「御保養中」であるゆえ、翌年の年頭御礼の賀は中止のことを申渡している。さらに、半年後の斉泰の不調については、翌天保14年6月にもまだ全快ではなく、「脚部之痺」がまだあり、未だ良くなく、歩行も不自由で、本復は容易なことではなく、「保養中」は重臣らに「諸事」手遅れなきよう諭している（「御親翰拝写」）。なお、小林豊後守は翌天保14年5月6日より17日まで、旧年中の御礼とともに御機嫌伺に金沢へ下向し、斉泰を診療、能を観覧する（「官私隨筆」）。

ところで、[表4]にみる高嶋正穎について、「荻野元凱門下姓名録」⁽¹³⁾によれば、漢蘭折衷医の荻野元凱が金沢に招請されていた寛政4年（1792）時、当地で元凱に入門した正安（正穎、文化期本多勘解由御家来医師として豊町に住 「金沢町名帳」、文政元年 1818 没）の子で、天保10年12月藩医になる（「先祖由緒并一類附帳」）。また、同じく[表1][表4]の藩医二木家の人物を整理すると、順伯（宝暦4年 1754 出仕、15人扶持、鍼医、天明2年 1782 没）=順伯（文化14年 1817 没）=順丈（文化14年相続、文政11年没、以下、=は養子を示す）=順孝（文政4年荻野徳興 島峰に入門 「荻野元凱門下姓名録」、文政10年相続、天保期斉泰の治療に当る。安政3年 1856 150石、慶応2年 1866 没）=並栄（「先祖由緒并一類附帳」）と続く。なお、二木順伯が才川荒町に住んでおり（「金沢町名帳」）、奥村文庫「官私拙筆」5巻、弘化2年（1845）11月17日条では、住居に関する願書が出されている。

次に、明石春作に関連して、明石家は「先祖由緒一類附帳」・「荻野元凱門下姓名録」などによれば、5代目明石豊右衛門（7代藩主宗辰代に8人扶持、御歩並、宝暦3年没）=養碩（金沢町医、9代藩主重靖の御用医、明和7年 1770 没）=元碩（寛政8年荻野元凱へ入門、同12年藩老長家の家中医、のち60石、文化4年没）=元仙（文化4年相続、同13年元凱の後嗣荻野徳興 島峰に入門、安政4年隠居、同6年没）=春作（実は小松町医田中養輔2男、天保13年9月小将組出仕、嘉永5年 1852 没）=春作（格庵、為元。嘉永7年、祖父の名跡を相続、安政4年出仕、文久2年 1862 当時在江戸の緒方洪庵に入門、同3年幕府西洋医学所句読師、のち長崎へ遊学、江戸にて幕

府海軍伝習通弁御用、慶応2年帰国、壯猶館翻訳方御用等歴任)と続く。すなわち、明石家は7代元碩より西洋医学を修得する家である。また、斉泰の治療に当たった小瀬貞安は[表1]20番の弘化元年「土帳」にも記され、小瀬舛庵(来吉)とも称する。なお、この人の先々代も舛庵と称し、寛政2年荻野元凱に入門、享和3年(1803)に没する(「先祖由緒一類附帳」)。

③天保から嘉永期における医療

以下、金谷御殿における真龍院・基五郎・豊之丞らの医療について紹介しよう。

【真龍院の治療】

金谷御殿における真龍院の治療について、天保13年から14年の様子を垣間見ると、13年6月12日長谷川学方が真龍院の治療担当を拝命し、7月28日、8月19・20日などには、当時金沢に招聘されていた小林豊後守も拝診する(「成瀬正敦日記」)。翌14年7月23日真龍院は前日暮頃より少々発熱、3度「瘧」の発作が生じ、暁時には高熱となり、学方が治療する。朝には、探元・快安も相診。熱は下り、御水目とも煮返し20匁を、昼には4匁3分の握飯を2つ召上る。薬は「九味清脾湯」に転ずる旨を探元が申述べる(「官私隨筆」)。

【基五郎・豊之丞らの治療】

天保12年及び14年の斉泰の子の基五郎・豊之丞の診療・治療についてみると、まず、江戸詰藩医藤井方亭が金沢來訪中であった12年6月27日、基五郎・豊之丞・桃之助(生後2週間ほど)を拝診する。また、同年7月17日小林豊後守・高嶋正穎も拝診を命ぜられる。この日の豊後守の拝診場所は「菊之間」であり、二ノ丸御殿で成されたのであろうか。以降の基五郎らの診療は、金谷御殿であろう。因みに、豊後守による基五郎の治療は、7月23日から8月25日まで毎日1度行なわれ、この間の薬は合計68帖であった(「成瀬正敦日記」6月~8月の条)。次に「官私隨筆」より天保14年の様子をみると、2月13日基五郎・豊之丞は少々高熱を発症する。昨朝正穎の拝診時や昨夕森快安・大庭探元の相診時、夜前・朝診の正穎・学方・篁斎の診療時まで御替わり無く、穏やかであったが、昼頃より両人とも、次第に疱瘡らしき容態となり、「荊防敗毒散加葛根」を調進する。基五郎は朝大便通あるが、豊之丞は無し。翌14日「諸事要用雜記」では基五郎・豊之丞兩人ともまだ熱が下がらず、基五郎は前日昼頃より、豊之丞は前日夕方頃より「見点」(斑点カ)が発生する。こうして、3月朔日には両人とも疱瘡が順快し、酒湯を行なっている(「官私隨筆」)。

なお、奥村文庫「静之介殿御幼少中後見之儀ニ付諸事留帳」によれば⁽¹⁴⁾、弘化4年出生の斉泰の子静之介は、藩老前田直良の養子となり、嘉永元年同家に移るが、安政3年没するまでの間、加藤邦安・江間篁斎・片山君平・長谷川学方・森快安・高嶋正穎・二木順孝・加来元貞・吉益北洲・大庭隨元・堀大算・中野隨庵・小瀬貞安・山本文玄斎・須崎凌三・明石昭斎(藩老村井家家中医、蘭学医)・嶋崎元鼎(蘭学医、小石元瑞門下)・水越玄寿・久保定三・河村鈎亮・石浦精庵・河村元安・高峰元穂(高岡町医、蘭学医、安政2年2月壯猶館舎密方臨時御用、同3年10月7人扶侍、同6年2月藩医、10人扶侍「先祖由緒并一類附帳」)ら多くの藩医・家中医・町医の診療を受けている。

三、京都遊学と医者の動向

次に藩医の遊学のための藩庫からの支給銀の問題、また、藩医以外の町医らの誓詞取立ての問題、さらに、京都医師の加賀藩出仕の問題についてみていく。

【藩医の京都遊学と藩からの支給銀】

わが国の医療・医学は、古代以来京都を中心に発展してきた⁽¹⁵⁾。前稿でも紹介したように、加賀藩の医者の遊学先にもその一端が見られる。また、文化10年(1813)5月20日、池田養中の京都勤学に

ついてみると（政隣記、30冊）⁽¹⁶⁾、同年寺社奉行成瀬内蔵助（当義）等に宛、藩医池田養中について、「御用」のため京都へ派遣する旨が達せられ、医業勤学として京都で「小児科専門之方」にて医業を「修行（業）」するよう、また、「自分」勤学として上京する趣と心得、万事質素に励むよう5月20日申渡され、6月5日発足予定という。そして、同史料の頭書に「江戸詰並御扶持方会所銀等御渡、並不時入用」の場合は聞届けの場合もあると記されている。これに依れば、藩医の遊学は「自分」、すなわち個人的な遊学であるとしつつ、他方「御用」のため藩庫から会所銀の支給があることを示しており、注目される。このことは、藩が遊学の経費を幾分か負担して、より専門的な高い技術を藩医に身に付けさせるという、藩が専門的に技術の向上を求める、医療の充実化を図る姿勢にあったともいえよう。なお、同史料同年9月20日条によれば、19日養中は病気のため帰国している。

さて、「成瀬正敦日記」天保13年8月21日条には、医者の京都遊学について次のように記される。

一、今井元真勤学銀（「銀」抹消）願之趣、快安・探元より紙面指出、遂僉議相伺、左之通覚書、今日相渡ス、但（原文、以下無記載）

白銀十枚 今井元真

右、為勤学、当年より上京二付、願之趣、無拵相聞候付、格別之趣を以、上京中毎歳七月如此被下之候事、

八月

右、元真義、五ヶ年之勤学御聞届二付、幸此度小林豊後守へ入門、隨身いたし、御外料之義も豊州受指図、於京都外師へ便り相書候筈之事、且当年分八、如此表銀子渡、来年より四ヶ年八、於京都、相渡候様、如例詰人へ申遣候事、於京都外師へ便り相書候筈之事、且当年分八如此表銀子渡、来年より四ヶ年八、於京都相渡候様、如例詰人へ申遣候事、

右史料より玄真の遊学の師では内科は小林豊後守（前稿）で、ほか外科は不明であり、一部公費から遊学銀が下賜されたことがわかる。このように、少なくとも天保期藩医が遊学する場合、藩庫から「勤学」料銀が下賜された。遊学を支援し、修学が済み帰国後は藩のため、藩主前田家のため尽力することが約束されていた。藩にとっては遊学は研修の意味が込められていたともいえよう。勤学の人選・仲介にはこの時期、快安・探元が中心に動いていた。なお、今井玄真の父正軒（昌軒）は文化9年漢蘭折衷医の華岡青洲に入門している⁽¹⁷⁾。医家における親から子への医術の伝習を考えれば、玄真もまた蘭医学を何らか修得しているものとみられる。

「成瀬正敦日記」にみる天保13年京都遊学の藩医について、[表5]に整理した。

[表5] 「成瀬正敦日記」にみる天保13年（1842）京都遊学の藩医

記載月日	医者名	京都の師匠	勤学料	取持の藩医	備 考
8月21日	今井元真	小林豊後守、 のち外科医	白銀10枚	森快安・ 大庭探元	当時在金沢であった豊後守の帰京時に随行、5ヵ年の勤学予定、2年目以降京都で支給
10月6日	丸山了悦	?	白銀5枚	森快安等	先代丸山徹叟精勤につき特別取計
10月15日	中村文安	太田肥後守（小児科、 在京中3人扶持）	会所銀	森快安・ 大庭探元	格別の人選による、「自分」勤学と心得、医業習熟の心懸け肝要
	賀来元貞	小林豊後守			豊後守一家の治療も少し担当
10月28日	南保玄隆	?	「勤学料」 白銀5枚	森快安等	近例は白銀10枚の所、当年は多数のため5枚

[表5]の南保玄隆の所で明らかのように、「近例」では「勤学中」は「白銀十枚宛」下さるところ、当年は遊学者が「三人」（実は4人）と多くなったため、白銀は5枚となったとする。これ以前、同月6日の丸山了悦の時点で、この年遊学者が複数出たため5枚となったとみられる。また、同史料天保13年11月朔日条では、「京都へ被遣置候御医者共、精不精暨諸方等之様子、見聞之趣、及言上候様、京都詰御歩横目等へ可申渡置旨、被仰出二付、書取を以、御大小将御横目へ申談、且京都詰人へも見聞之趣与申上候趣、被仰出之趣、今便申遣」と見える。すなわち、京都への遊学者に対し、精不精など見聞させた内容を報告するよう、京都詰の御歩横目など、京都詰人に申渡しており、注目される。あくまで藩費から幾分か支給し、藩のため、前田家のため、監視された上での医学修業であったことがわかる。また、[表5]の太田肥後守（1778～1851）は、文化6年典薬寮医師、丹後守、文政3年肥後守、天保13年9月権医博士となる小児科医で、「天保医鑑」に「源庭之、字士若、号紫水、博学、善詩文 間之町夷川北」と見える⁽¹⁸⁾。また、中村文安は良安と同一とみられ、小石元瑞門下である（前稿）。

一般に医者の修業には、藩医や家中医、町医・村医など、先代や父が師である場合も含み、師家について学ぶ場合や寛政期以降は藩校明倫堂で学ぶ、或いは三都など藩領外へ遊学する場合など、様々な方法があった。遊学について、もう少し詳細に見ていくことは別稿に譲ることとした。

【誓詞取立ての事例】

町医者が金沢城に登城し、藩主家の治療に当たる場合、近世前期では綱紀の娘豊姫の治療に貞享5年（1688）6月、明石立庵・岸田如安が町奉行へ誓詞提出を申渡されている事例がある⁽¹⁹⁾。また、天保期斎泰拝診につき、当時町医者の山本文玄斎・鶴見啓輔の誓詞取立て規式に関し、「猪山直之日記」天保13年（1842）6月20日条によれば、波の間の屏風囲の内において、「御用部屋衆奥小将横目」が立会い、見届けている。しかし、誓詞の内容は明らかでない。因みに、斎泰の治療に当たった片山君平・森良斎の兩人は奥村家・横山家の家中医である。片山は享和3年（1803）相続、文化10年（1813）華岡青洲に入門、天保13年12月藩医となる（170石、「先祖由緒并一類附帳」）。一方、森は文化2年相続、片山と同様、同年同月藩医になる（120石、「先祖由緒并一類附帳」）⁽²⁰⁾。これら、両人の天保13年12月藩医登用の際の誓詞取立ての様子が「成瀬正敦日記」11巻、天保13年12月22日条にみえる。この時井上井之助（辨義）が立会い、成瀬主税（正敦）が見届けている。右井上は当時、表小将横目であり、成瀬は御近習御用の役職であった。このことから、当時、重臣の家中医が「診御用」という藩主家の治療を行なうため、藩医として登用される際は、これら表小将横目が立会い、御近習御用が見届けていることが分かった。

【京都医師吉益北洲の出仕】

「官私拙筆」1巻、弘化元年（1844）11月2日条によれば、同年9月5日に死没した藩老奥村栄親の「御療養方」を吉益北洲に依頼していたとし、同人の金沢「御指留」が聞届られたと奥村栄通は記している。続く弘化4年、同史料10・11巻によれば、京都の町医師吉益北洲は、弘化4年正月8日時点で金沢へ「罷越居」り、当地に「長ク居住いたし度存念」であった。同人は御広式中蘗染川の実兄であり、彼の当藩出仕は、真龍院の希望もあり、大庭探元らの願もあった。京都での人別の義があるゆえ、よく僉議し、同年3月16日染川の勤功により、その養子として新知100石を下賜することとなる（正月8・9日、3月16日条）。なお、吉益北洲に関しては、玉川図書館村松文庫「いろは附金沢医家名寄」に「京にいなかり 吉益北洲」と見える⁽²¹⁾。また、吉益北洲は、京都の医家門人帳（東京

教育研究所、両全堂文庫）が残っている医家として著名な吉益家の出身である。『東洞全集』によれば、北洲の代（1814～1843）の京都の門人は675人に及ぶという。さらに、「天保医鑑」には「内科傷寒論家 名順、字信夫、号北洲、東洞孫」と記されている⁽²²⁾。

なお、「官私隨筆」8巻、弘化3年9月23日・27日条に依れば、藩老奥村惇叙の重篤の際に「病養頼置」いたのは、藩老横山家の家中医の津田隨分斎であり、このほか、藩医の鈴木立伯・森良斎・中野隨庵・黒川良安、並びに奥村惇叙家の家中医桑名二見・土岐安恵・土岐大安・桑名大純・佐伯拙斎であった。ここにおいては、陪臣の家中医や藩医が、他家の藩士（重臣）の治療にも携わった1例をみることができる。

おわりに

以上、近世後期の加賀藩の医者について考察してきたが、次のようにまとめることができる。まず、後期の侍帳4種においては、近世中期に初出し、後期まで続く医家がもっとも多いことがわかった。また、近世前期よりほぼ各時期を通して、後期まで存続する家は13家程で、近世全体の藩医の16%程に当る。一方、近世全体の侍帳・町絵図にみる医者の多くは、藩医であるが、町絵図や天明3年の侍帳などにおいて、一部町医者身分の者も含まれている。その人数と禄高など、近世の前期・中期・後期の各時期における侍帳・町絵図登載の医者は前期では、9～29人、中期では35～49人（天明3年の侍帳では御用医者である町医6人を含む）、後期では32～54人というように、次第に藩召抱えの医者や御用医者の人数が増加していることがわかる。また、各時期のそれぞれの侍帳の記載の仕方、登載人数はまちまちであるが、記載された総藩士数に占める医者の数は、前期・中期がおよそ1～2%ほどで、後期が2～3%というように、近世後期には数だけではなく、医者の占める割合も大きくなっている。藩の医療対策の充実化を垣間見ることができる。次に近世を通して、藩医の禄高をみると、高い方は600石から低い方は小判10両までであったが、ほぼ300石前後から5人扶持である藩医が多く、彼らはおよそ藩御抱えの者の中では中級クラスに相当する。

次に、城内における医者の治療の具体相について述べた。まず、栄操院の治療については、天保12年精神的疲労が重く、また下痢が続いたため、加黄芩紫胡・錢氏白朮散等が処方された。天保期藩医の大庭探元・丸山徹叟・森快安ら及び藩老横山家の森良斎、同奥村丹後家の片山君平といった家中医、さらに禁裏医師の山本安房介も京都より招請され、治療に当った。また、同年栄操院の時期当りによる水瀉・発熱などの治療には、柴芩湯等も調進され、右医者のほか、藩老本多家の家中医三宅当一や町医の広野了玄、さらに江戸詰の蘭方の藩医藤井方亭も治療を行なった。しかし、嘉永3年水腫・痔脱疾が起り重体に陥り、附子や熊の胆も処方されるが、終に逝去する。当時藩老前田美作の家中医山本文玄斎、家老前田図書の家中医渡辺元隆、町医の洲崎白順らも治療に加わった。すなわち、この時期栄操院の治療を行なった医者は、藩医・家中医・町医合わせて20人程であった。

また、斎泰の天保13年の様態では、脚気が起り、足のむくみ、発熱・乾吐・便秘・痃癖・出来物などに対し、除湿湯・大靈丸などが処方され、多数の藩医をはじめ、重臣の家中医、町医のほか京都から招請された宮廷医師小林豊後守も含め、およそ25人ほどがこの年治療を行なった。

さらに、金谷御殿での真龍院については、天保14年瘧の発熱に対し、九味清脾湯等が調進され、藩医の長谷川学方ら、及び小林豊後守も拝診する。また、基五郎・豊之丞の天保12年の診療については、豊後守の拝診は二ノ丸とみられる菊の間でなされる。翌々年の同14年兩人は疱瘡に罹り、「荊防敗毒散加葛根」を処方されるが、高嶋正穎らが治療している。なお、弘化4年出生した斎泰の子静之介は嘉永元年藩老前田直良家の養子に入り、同5年加藤邦安・江間篁斎等藩医や家中医・町医ら多くの医者

の治療も受け、熊の胆・桃毒散等が処方されている。

最後に、医者の京都遊学と藩の援助金について、すでに文化期池田養中の事例もみられるが、天保期今井元真・丸山了悦・中村文安・加来元貞・南保玄隆らの事例では、会所銀から勤学料として、白銀10枚、または5枚の支給を確認した。また、彼らの勤学の取持人は藩医の森快安・大庭探元であり、斎泰などの治療においても、兩人はこの時期、藩医の代表格であったことが推測される。なお、幕末期、能登方面などからの遊学については今後の課題としたい⁽²³⁾。また、天保期の誓詞取立てについては、町医の山本文玄斎・鶴見啓輔の事例から、波の間の屏風囲い内で御用部屋衆・奥小将横目の立会・見届けが成されていることが分かった。他方、重臣の家中医であった片山君平・森良斎の藩医任用時の誓詞は、表小将横目が立会い、近習御用が見届けていることを確認した。さらに、京都の町医者で多くの門下生を有する吉益北洲における弘化期加賀藩出仕の事例を考察した。この件の仲介をしたのが大庭探元らであり、蘭学医が含まれている。以上のように、栄操院・斎泰などの治療も含めて蘭医学の修得者が多く含まれ、天保から嘉永期にかけては、より多くの蘭学医の活動がみられることを強調したい。

さて、ここに至り、本稿及び数年前より筆者が取り組んできた加賀藩の医者について、近世前期・中期・後期の各時期の医者・医療について総括してみたい⁽²⁴⁾。

まず、1点目は、各時期の金沢城内における藩主の医療の代表的な医者について整理すると、例えば、前期の5代藩主綱紀には堀部養叔(200石 300石)、中期の6代藩主吉徳の晩年には南保玄伯(300石)・池田玄真(200石)・佐々伯順(150石 250石)・大高東元(200石)、後期の12代斎広の江間篁斎(300石)・梁田養元(150石)、13代斎泰の天保期の診療では、大庭探元(150石 250石)・森快安(200石)らであった。彼らは知行高からみれば、藩医の中では最上級ではなく、上の下か、或いは中の上といった辺りである。藩主の治療に当たった医者は、このようなランクの藩医の中から、かつ、史料的制約があるが、恐らく藩主や近習、或いは重臣らの信任の篤い者が選ばれたであろう点、近世を通して固定的なことといえよう。

2点目に、町医者から藩医への昇格は、全時期を通して見られることであるが、前期から後期にかけて、救済小屋である非人小屋⁽²⁵⁾や公事場などの籠舎といった藩の施設に勤務する医者に関して、白井家のように町医者身分のまま、藩の御用医者を勤める医家が世襲で存続する一方、長谷川・白崎家などのように、中期から後期にかけ、町医者から藩医に登用される場合も混在する。前者の場合、窮乏等による発病者、犯罪者らの医療は、領民に対する藩の救恤策を意味することはいうまでもない。このような場合の領民の医療は、主に町医者身分の者が担当するといった身分的な問題、及び藩医起用には財政的に困難を有するといった、両面の問題もあるものとみられる。

他方において、前期から後期まで、優秀であるなど町医者にも屋敷が下賜される場合もある点は、固定化していた。その背景には、藩の御用に携わる御大工・御細工人等と同様、特殊な技術を有し、まして、人命を預かる医者に対しては、戦国の世とは異なり、たとえ町医者であろうと、医者総体は、近世前期より一貫して、それなりに尊重される存在であったものとみられる。

3点目に、藩は数多くの医者を召抱え、町医者も含め、災害や疫病の流行に対し、医者を領内に派遣するなど、領民の医療に当たらせるが⁽²⁶⁾、こうした藩による医療政策は、領主による領国支配にとつて、何らか仁政が求められてのことであるゆえ、より優れた医者を恒常に希求する姿勢は、全期を通じ、一貫していたものとみられる。

4点目に、同時に、当然のことながら領内の医療の第一は、藩主前田家の医療にあったことはいうまでもない。前期より後期へ一貫して変わらなかったのは、当時医療の中心地京都より著名な医者を

金沢に招請したことである。3代利常の時の武田道安信重、5代綱紀の代の南保玄達・津田寿軒ら、6代吉徳の代の辻祐安、11代治脩の時の荻野元凱・畠柳泰、12代斉広の時の竹中文輔、13代斉泰の代の山本安房介・小林豊後守などである。また、江戸も加え、優秀と見做された三都の町医者を藩に登用することも一貫していた。さらに、藩医に留まらず、生命に関わる病に対し、より広く、より多く、より正確な情報を求め、藩医はさることながら、御家中医・町医等をも加えて、各時期ごとに、常に何人の医者をして、前田家の治療に当たらせたこともまた、前期より後期まで固定化していた。

5点目に、しかしながら、後期には藩士全体に占める医者の割合も増加するといった変容がみられる。このことは藩の医療政策における一つの充実化と解せる。また、こうした中で、近世中期の後半頃より漢蘭折衷医に師事し、蘭医学を修得する医者も現れ始め、斉広の代における治脩の治療に、蘭学者の宇田川玄真を招請したことなどを契機に、緩やかではあるが、蘭医学受容の要素を徐々に強めていく。かくして、蘭医学を学んだ森良齋家や片山家らの御家中医のほか、黒川家・梁田家などの町医者といった、いわば御用医者が藩医に昇格し、出仕するケースも顕著となってくる。さらに、近世前期・中期より後期まで存続する医家や藩医の中の代表格の医家らが活動し、厚遇される傍ら、少禄ではあるが、藤井方亭・吉田長淑ら著名な蘭学者も登用する。同時に、新しい医学、蘭医学を修得した医者の重要度も増してくるなど、次第に医者・医療面での変容が見られる。

こうした変容は、幕末・維新期にかけ、さらに色濃くなるものと推測され、今後、黒川良安・高峰元穂ら蘭医学者・西洋医学者をはじめとした、蘭医学修得者の動向などについても課題となつた。

[註]

- (1) 加賀藩の疾病史などの研究には、前川哲朗「疱瘡・コレラの流行と対策 藩政期疫病史の試み」(『市史かなざわ』6号、平成12年)、竹松幸香「加賀藩上級武士の疾病・医療について」(『加能地域史』47号、平成20年)、徳田寿秋「医療の発展と旧医師会の活動」(『石川県医師会創立百年史』平成25年、北國新聞社)などがある。また、蘭学史の分野では津田進三「日本最初の蘭方内科医吉田長淑」(『石川郷土史学会誌』8号、昭和50年)、片桐一男『蘭学、その江戸と北陸』(思文閣出版、平成7年)、沼田次郎『洋学』(吉川弘文館、平成8年)などがある。なお、最近社会史の立場から京都橘大学女性歴史文化研究所『医療の社会史』(思文閣出版、平成25年)が出されたが、加賀藩に関しては触れられていないようである。
- (2) 池田仁子(a)『金沢と加賀藩町場の生活文化』第3章(岩田書院、平成24年)、(b)「金子鶴村の蘭学と海外科学知識 化政期加賀藩蘭学受容の一側面」(『日本歴史』698号、平成18年7月)、(c)「加賀藩蘭学と医者の動向」(『北陸史学』55号、平成18年)、(d)「大高元哲の事績をめぐって 加賀藩蘭学の受容と展開」(加能地域史研究会『地域社会の歴史と人物』北國新聞社、平成20年)、(e)「医者と暮らしの諸相」(19世紀加賀藩「技術文化」研究会『時代に挑んだ科学者たち』北國新聞社、平成21年)、(f)「近世金沢の医療 伝統の礎と社会史的意義を探る」(地方史研究協議会第64回 金沢 大会報告成果論集、雄山閣、近刊予定)など。
- (3) 池田仁子(a)「「寛文七年金沢図」等にみる医者の居住地と城内での医療」(『金沢城研究』8号、石川県金沢城調査研究所、平成22年)、(b)「加賀藩前期の医者と金沢城内での医療」(『同』9号、平成23年)、(c)「近世中期加賀藩の医者と金沢城内での医療」(『同』10号、平成24年)、(d)「金沢城を中心とする化政・天保期の医療と蘭学医」(『同』11号、平成25年)。
- (4) 池田仁子、前掲(3)(c)38頁。
- (5) 本稿では刊本(金沢市立玉川図書館『金沢町名帳』平成8年)を活用。
- (6) 池田仁子「近代学問の底流と育まれた人材」(池田公一『石川県謎解き散歩』新人物文庫、平成24年)。
- (7) 「寛文七年金沢図」・「延宝金沢図」の両図における記載総藩士等の人数については、木越隆三「17世紀における城下町空間の変容と地子町急増 寛文7年金沢図・延宝金沢図の比較から」(前出『金沢城研究』9号)、[表3]参照。

- (8) 栄操院の医療については、前田育徳会『加賀藩史料』（以下『藩史料』と略記）15編、清文堂、昭和56年復刻にも一部収録。
- (9) 長山直治『兼六園を読み解く』桂書房、平成18年、299・300頁。ほか京都医師山本安房介・小林豊後守の竹沢御庭等の拝見についても右書に詳しい（233～235頁）。
- (10) 「天保医鑑」「洛医人名録」は京都府医師会『京都の医学史』思文閣出版、昭和55年に収録。山本安房介については右書1287・1288頁、『同 資料編』509・529頁。
- (11) 池田仁子、前掲(2)(c)。
- (12) 「猪山直之日記」は石崎建治「加賀藩士猪山直之日記」（一）～（三）『金沢学院大学美術文化学部文化財学科文化財論考』3号、『同大学紀要 文学・美術編』2号、『同』3号、平成15～17年）を活用。また、斉泰の天保期の治療に関しては、『藩史料』15編に一部収録。なお、斉泰保養中の重臣への申渡における「御親翰拝写」は右刊本に依った。
- (13) 京都府医師会、前掲(10)『京都の医学史 資料編』に収録。また、本稿における「先祖由緒(并)一類附帳」はすべて加越能文庫蔵。
- (14) 奥村文庫蔵の静之介に関する史料は、石野友康氏の御教示による。
- (15) 医療・医学が京都を中心に発展してきたことに関しては、酒井シズ『日本の医療史』東京書籍、昭和57年、新村拓編『日本医療史』吉川弘文館、平成18年、池田仁子、前掲(2)(f)による。
- (16) 池田養中の京都勤学に関しては、『藩史料』12編にも収録。
- (17) 池田仁子、前掲(2)(c)。
- (18) 京都府医師会、前掲(10)793・1303・1359頁、『同 資料編』508頁。
- (19) 池田仁子、前掲(3)(a)。
- (20) 池田仁子、前掲(2)(e)。
- (21) 池田仁子、前掲(2)(e)。
- (22) 京都府医師会、前掲(10)『京都の医学史 資料編』229・231・524頁。
- (23) 小林元貞の浅野長門守への入門、鈴木大助の長崎への遊学、岡野仙策の京都への遊学と寺尾元長・高階丹後介の入門、江戸の多紀樂春院への入門が認められ、これらについて高堀伊津子氏の御教示による。また、館寛蔵の小石及び、萬年大純への入門をめぐる史料等に関しては、見瀬和雄・堀井美里の両氏より御教示いただいた。
- (24) 池田仁子、前掲(2)(a)～(f)、(3)(a)～(d)。
- (25) 非人小屋に関して、本稿では、史料・史実に即し取上げた箇所があるが、差別を容認するものではない。なお、非人小屋での医療や近世金沢の医療に関しては、池田仁子、前掲(3)(c)の註、及び(2)(f)で述べた。
- (26) 加賀藩の領民の医療については、池田仁子、前掲(2)(f)及び(3)(c)・(d)参照。

[付記]本稿作成に当り、金沢城調査研究所の木越隆三・石野友康の両氏には大変お世話になった。衷心より感謝申し上げる。